

## 「赤ちゃん」の類型化についての分析

吉井均枝\*

## Study of the categorization of 'baby' category

Masae YOSHII

## 抄録

人は、赤ちゃんに対してどのように接しようとするものなのか。本研究では、日常の生活において、人びとが実際に赤ちゃんをどう理解しているのか、赤ちゃんをどのようなものとして捉えているのかの一端を探るために、赤ちゃんが周囲の人びとと遊ぶ映像を参照しつつ人びとが語ったことをデータとして、ハーベイ・サックス (Harvey Sacks) のMCD (Membership Categorization Device) の考え方に基づく分析を行った。インタビュー対象者の語りをMCDの三つの性質から検討し、対象者にとっての「赤ちゃん」カテゴリーがどのようなものであるかを探った。さらに、このカテゴリーに特有の性質として、「赤ちゃん」の非言語行動が問題となること、それは他の社会成員が代弁するようなものであること、また「赤ちゃん」は社会においてマージナルな存在として扱われているのではないかとすることを考察した。人びとは、言語を用いない「赤ちゃん」に対して、様々な属性を付与していると考えられる。赤ちゃんを「カテゴリー」として捉える研究を行なうことで、人びとの日常的な理解のメカニズムについて多くの示唆が得られるのではないかと。

## Abstract

In order to study how the members of the society understand "baby" in their daily life, this paper tries to analyze how that can be seen in their ordinary discourses, which were transcribed and extracted as the data from five people's unstructured interview talks. Using the Harvey Sacks' idea of MCD (Membership Categorization Device), the three aspects claimed by Sacks were examined in the first place. Then, further characteristic aspects of 'baby' category, which can be observed from the data, were pointed out and discussed. The members of 'baby' category only use non-verbal actions, and thus it is the other adult members who *speak for* them by interpreting the non-verbal communication between the baby member and adult member. Because of such aspects, 'baby' category seems to be a category of 'marginal' objects in our society. By studying the nature of 'baby' category and how other members attribute some characteristics to it in their mundane talks, we can be informed a lot about the mechanism of our everyday mutual understanding.

\* 筑波大学大学院図書館情報メディア研究科博士後期課程  
Doctoral Program  
Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba

## 1. はじめに

人は、赤ちゃんに対してどのように接しようとするものなのか。

日常生活において、わたしたちはお互いに関わりをもち、コミュニケーションを行なうことでお互いを理解し合う。そうしたコミュニケーションの中でも“言語”によるやり取りは、わたしたちが相互理解する上で大きな役割を果たしていると考えられる。だが、赤ちゃんと接する場合、わたしたちは成人同士で接する場合と同じように、言語を用いることができない。しかも、赤ちゃんは、《会話能力を含む様々な能力を、わたしたちと同じようには身につけていない、成長段階にある何者か》とみなされているのではないだろうか。

本研究では、日常の生活において、人びとが実際に赤ちゃんをどう理解しているのか、赤ちゃんをどのようなものとして捉えているのかの一端を探ることを試みる。赤ちゃんが周囲の人びとと遊ぶ映像を参照しつつ、人びとが「赤ちゃん」について語ったインタビュー・データを、ハーベイ・サックス (Harvey Sacks) が提唱したカテゴリー論、MCD (Membership Categorization Device) の考え方に基づいて分析を行ない、人びとが「赤ちゃん」というカテゴリーをどのように用いているかを調べることとする。

### 1.1 本研究の視点

わたしたちは、赤ちゃんをどのように捉えてきたのだろうか。

赤ちゃん、すなわち乳幼児に対しては、その言語発達を中心に、近年さまざまな研究がなされている。正高信男によると、そのほとんどが「大人にも意味のわかる単語を話しはじめてからの子どもの発達」について述べているものだという<sup>1)</sup>。また、乳幼児の研究とは、乳幼児を心理学などの研究棟へ連れてきて、親とは離して実験をするという方法がとられることが多かった。しかし最近では、現実に乳児が生活する現場を「フィールド」と捉え、そこで営まれていることを探る、フィールドワークという方法を用いて、日常生活の中での乳児の普段どおりのふるまいを研究する例も増えている。例えば、麻生武 (1992)<sup>2)</sup>、やまだようこ (1987)<sup>3)</sup>、デズモンド・モリス (1995)<sup>4)</sup> による研究をそうしたものとして挙げることができよう。なかでも、正高はヒトの乳児全般に渡る特徴についてフィールドワークを行ない、生物学的かつ生態人類学的見地からの研究を展開している<sup>5)</sup>。正

高の研究では、乳児が言語を話す以前の段階にも焦点が当てられており、1歳未満の乳児の身体全体の運動や発達の重要性が主張されている。

日常生活の現場 (フィールド) において、言語を話す以前の赤ちゃんは、周囲の人びととどのように関わりあっているのか。このように問いかけるとき、その能力や発達を研究するという視点とは全く異なるが、赤ちゃんを取り巻く周囲の人びとの側に着目した視点を取ることも可能である。すなわち、赤ちゃんの知能を探ろうという枠組みから赤ちゃんを研究するのではなく、現場を日々生きる人びとや赤ちゃんと接する“普通の”人びとにとって赤ちゃんはどう理解されているか、《人びとにとっての「赤ちゃん」》とはいかなるものであるのかを知ろうという視点である。このような視点に立った場合、赤ちゃんの生きる現場、すなわち日常生活世界における「赤ちゃん」という存在や、赤ちゃんを交えた人びとの生活の中での実践 (practice) が明らかになるのではないかと。 “もの言えぬ”、そしてそれゆえ社会成員としてはマージナルなヒトである赤ちゃんという存在を、わたしたちはどう位置づけているのか。現場の当事者たちによる「赤ちゃん」への理解や接し方に着目するこのような研究は、「赤ちゃん」についての日常的な理解や知識の研究と考えることができる。

わたしたちの“日常的な”理解や知識についての問題は、知識社会学において、日常生活の“現実”がわたしたちにとって現実として映り、理解されているのはいかにしてなのかを問うことの中で探求されてきた。ピーター・L・バーガー (Peter L. Berger) とトーマス・ルックマン (Thomas Luckmann) は、知識社会学の新たな展開を提唱する中で、日常生活の現実がわたしたち社会成員の相互作用によって間主観的なものとして構成されていると考え、またその際、わたしたちの相互作用は言葉を介したものであり、それゆえ言葉の下には日常生活の知識が蓄えられていると述べている<sup>6)</sup>。また、1967年にハロルド・ガーフィンケル (Harold Garfinkel) が創始したエスノメソドロロジーという社会学の領域においては、社会成員が当たり前のものとして用いる知識、“日常知”に焦点が当てられ、人びとが生活の現場で日々、こうした日常知をいかに用いているかを解読する試みがなされてきた<sup>7)</sup>。そして、こうした日常知を用いた人びとの実践の中にも、一定の規則や秩序を見出すことができることが明らかにされてきた。

例えば、初期のエスノメソドロロジーにおいて大きな貢献をしたとみなされているサックスは、まさに「赤ちゃん」の例を用いて次のようなことを述べている<sup>8)</sup>。以下

の文が話されるのを聞いたとき、わたしたちはそれをどのように聞くだろうか。

“The baby cried. (赤ちゃんが泣いちゃった)  
The mommy picked it up.” (ママが[それ/その子を]抱き上げたよ)

この二行の文章について、わたしたちは、2行目の“it”（それ）が1行目の“The baby”であり、2行目の“The mommy”は1行目の“The baby”の母親であるというように聞く。言語を分析しようという立場に立つなら、この文章には他の多様な解釈が考えられるかもしれない。だが、少なくとも、この発話が日常生活の現場で話されたものである場合、その現場にいる当事者であるなら、わたしたちは当たり前のように聞く。一体それはいかにしてなのか、とサックスは問いかけている。日常生活の中で、上のような発言を、《赤ちゃんが泣いたから、赤ちゃんのママがその子をあやそうと抱き上げているのだ》と聞くとき、わたしたちの日常知が働いているとサックスは示唆する。

本研究では、赤ちゃんや赤ちゃんが関わるコミュニケーションを研究するために、言語を話しはしませんが恐らくは身体的なコミュニケーションを成立させているであろう赤ちゃんを、わたしたち成人がどう理解し、関わっているのかについて探るという視点を取ることにした。そして、赤ちゃんについての日常的な理解の仕方は、人びとが赤ちゃんについて当たり前で語っていることの中から読み取れるのではないかと考え、人びとの語りを分析することから、こうした疑問の一端を明らかにすることを試みることにした。

## 1.2 人びとが用いるカテゴリとしての「赤ちゃん」

赤ちゃんが言葉を使わないとしても、赤ちゃんを取り巻く人びとは、赤ちゃんについて言葉に出して語っている。また時には、赤ちゃんを“代弁して”何かを語ることもあるのではないだろうか。

人びとが赤ちゃんについて語ることは様々であり、またそれを分析する際にも分析する切り口は多様である。例えば、人びとに「赤ちゃんについてどう考えるか」と質問して、彼らの考えを聞くこともできるであろう。しかし、本研究では、赤ちゃんに関する日常知を探るのであるなら、赤ちゃんについての人びとの考えを抽出するといった切り口ではなく、人びとが —— できる限り自然な状況で<sup>9)</sup> —— 赤ちゃんを話題とする話の中で、互いに当たり前で受けとめられるであろうものとして語

る、その語り方に着目するという切り口を取る方が有効であると考えた。そこで、語りの中で出現する「赤ちゃん」という言葉を一つのカテゴリとみなし、人びとによって「赤ちゃん」というカテゴリがどのように用いられているかを分析していくことにした。

日常会話において人びとが様々なカテゴリを用いて互いやその場にいない人びとを理解しているということは、サックスによって指摘されている。サックスはそれを「成員のカテゴリ化装置 (Membership Categorization Device, 以下ではMCDという略を用いて述べる)」という理論として展開した<sup>10)</sup>。MCDは、社会成員によって頻繁に用いられ、人びとが何ごとかを理解する上で極めて強力に働く装置であり、人びとが日常生活において何かを理解したり意味づけしたりするメカニズムを探る上で有効であるとサックスは示唆している。

本研究では、人びとの赤ちゃんについての語りを対象として、サックスのこのMCDという考え方に基づき「赤ちゃん」カテゴリの用いられ方を分析することにした。サックスによるカテゴリとは、社会成員がお互いを理解し合ったり、会話の中で話題に上った人びとや人びとの集団を理解する際に用いられているものである。このカテゴリについては、初対面の人と会話する場合を例に考えるとわかりやすい。初対面の人と会話するとき、「ご職業は?」「ご出身は?」という問いかけがよくなされる。サックスは、このような質問によって人びとは相手が“どのカテゴリに属するのか”を探っていると考えた。そして、「大学院生です」という答えが返ってくるなら、「大学院生」というカテゴリに当てはめてその人を理解していると推測した。人びとがこのように特定の人を理解する場合、当てはめられる可能性のあるカテゴリは複数存在する。こうしたカテゴリは、研究者が任意に分類して決めるようなものではなく、社会成員がその生活の現場の中でその都度用いているものである。

サックスはさらに、カテゴリについて三つの性質を挙げている。本研究では、その三つの性質から捉え、「赤ちゃん」カテゴリはどのようになっているのかを中心に、このカテゴリの用いられ方を検討していくことにした。以下で、その三つの性質について概要を説明したい。

### 1.2.1 カテゴリは人びとによって “which type set” の中で用いられている

カテゴリは、“カテゴリ・セット (category set)” というグループに属している。例えば「女性」「男性」と

というのは、一つのカテゴリー・セットをなしている。カテゴリー・セットには様々なものがあるが、どのセットにおいても、そこに属するカテゴリーに含めることのできる人びとがいる。そして、一つのカテゴリー・セットを取り上げるなら、人びとをそのどこかのカテゴリーに振り当てることができる。こうした意味で、カテゴリー・セットは which type set (セットの中のどれか一つに人びとを当てはめるもの) として用いられている。サックスは、日常生活において、特定のカテゴリー・セットに当てはめて人びとを理解しようとする際、「どのカテゴリーにも当てはまらない」ということがないのが、MCDの第一の性質であると述べる。

### 1.2.2 カテゴリーには、“inference rich” (豊かに推論可能である) という性質がある

社会成員は、カテゴリーの下に、その社会についての莫大な知識をもっているとサックスは述べている。例えば、その人の職業を尋ねて「大学院生です」と言われると、その人について多くを知ったように感ずる。そして、「大学院生」というカテゴリーの下にある知識に基づいて、「どの大学で勉強しているの?」「専攻は何?」といった、適切な話題へと進むことができる。一連の会話の中では、人びとはお互いに蓄積されている知識をその都度参照しあっている。そして、カテゴリーが言及されるたびに、知識のうち適切な部分が引き出され、更新されていく。

### 1.2.3 どのカテゴリーに属するどのメンバーも、そのカテゴリーの代表者となる

カテゴリーに属する人(すなわちメンバー)は、そのカテゴリーの一員として理解されて何らかのふるまいをするなら、そのカテゴリーについての知識をつけ加えたり更新したりしていく。つまり、カテゴリーのメンバーに接する人びとは、そのメンバーのふるまいを、メンバー個人のものとして受け取るのではなく、《そのカテゴリーに属するメンバーのふるまい》として受け取るのである。さらに、あるカテゴリーの下に蓄積されている知識は、そのカテゴリーに属するメンバーなら誰にでも、適用されることになる。つまり、特定の人々が《あるカテゴリーのメンバー》として理解されているとき、その個人の考えやふるまいが事実どうであろうとも、そのカテゴリーに属するメンバーの考えやふるまいとして蓄積されている知識と関係づけて理解されるのである。こうした意味で、どのカテゴリーに属するどのメンバーも、そのカテゴリーの代表者となる、とサックスは述べる。

例えば、ある人が「日本人」としてアメリカを訪れたとしよう。アメリカ人に「アメリカの食べ物について、どうお思いですか?」と尋ねられて、その人が答えることは——実際にその人がグルメであろうと、外食など一切しなかりょうと、和食嫌いであろうと、“一般的”日本人であろうと——“アメリカの食べ物について「日本人」はどう思っているか”の答えとして、通用していく。

あるカテゴリーの知識は、メンバーが望む望まないに関わらず、引き出されてしまう。例えば、「筑波大学院生」というカテゴリーに属するメンバーたちは誰であれ、メンバーの一人がこのカテゴリー名の下に良いことをしたり悪いことをすると、否応なしにこのカテゴリーの“評判”を背負うことになる。

サックスの提唱したMCDは、エスノメソドロジーやエスノメソドロジーから展開した会話分析(Conversation Analysis)でその後も多く取り入れられ、日常知の研究に発展を促したと考えられる。例えば阿部耕也は、語りの中から生起する<子ども>らしさと人称-呼称との関係を論じている<sup>11)</sup>。また、「赤ん坊」というカテゴリーについて、ケネス・ライター(Kenneth Leiter)は、サックスのMCDに言及し、「『赤ん坊』という表現は、『家族の一員』としての『赤ん坊』という内容を指示することもできるが、また、人生のある段階(赤ん坊、十代、成人、老人)を指示することもできる」と述べ、このカテゴリーが《家族の一員》と《生涯段階(life stage)》という二つのカテゴリー・セットに属するものであることを指摘した。すなわち、ライターによれば、「赤ん坊」というカテゴリーは、文脈によって社会成員の付与する意味が二通りに分かれるようなカテゴリーである<sup>12)</sup>。以下の分析では、このような点にも考慮し、次に述べる方法で収集した語りのデータを分析していきたい。

## 2. 「赤ちゃん」についての語りのデータの作成

### 2.1 研究手法

第一章で述べたように、本研究ではインタビュー調査法を用いる。インタビュー調査法とは、社会調査法の一種類で、質的調査法の代表的方法である。

質的調査とは、①調査対象の質的側面に着目し、②質的データを作り上げ、③質的な分析を行なう、社会調査である<sup>13)</sup>。また、フリック・ウヴェ(Flick Uwe)によれば、量的な研究の限界を自覚し、主観的意味や日常的経験と行為を研究したり、人びとの語ることについて考

察を深めたりする研究や、具体的な人や状況に結びついた知見を、データに基づいて生み出していくための研究に適した調査法であるとされる<sup>14)</sup>。

大谷信介は、個人の主観的な意味づけ(あるものに対してどのように思っているのか)を知ろうとするとき、質的調査は威力を発揮するという<sup>15)</sup>。したがって、本研究のように、語りにおけるインタビュー対象者たち個人のカテゴリーの用い方を探ろうとする研究は、質的調査となる。

インタビューには、統制された方法と非統制的な方法があるが、対象者にできる限り自由に語ってもらうために、非統制的な方法(自由形式)を採用することにした。インタビュー終了後は、録音データを転記して、トランスクリプトの形でデータを保存した。そのうち、「赤ちゃん」というカテゴリーの用いられ方に特に関わりと判断した部分を抜粋し分析の対象とした。

## 2.2 インタビューの手順と調査対象者の選出

本研究で実施するインタビューの手順を考えたとき、プレテストで、人びとに、ただ赤ちゃんのことを聞いても、なかなか具体的な話は出てこないという経験があったので、「赤ちゃん」についての具体的な語りを得るためには、何らかの工夫が必要であると考えた。そこで、著者が乳児コミュニケーションの研究の一環としてすでに収集したうちの89秒の乳児の映像<sup>16)</sup>を、インタビューの冒頭で見ってもらうことにした。初めて見る人には、映像中で何が起きているのかわかりにくいことも予想されたので、インタビュー対象者の興味にしたがって映像データを1～3回以内で流しながら、インタビューを行なうこととした。

インタビュー実施直後はかならずエスノグラフィック・メモをとった<sup>17)</sup>。これはフィールドワーカーが現場の状況や文脈を補うためにとるメモで、本研究の場合、インタビュー対象者の語りとして録音したことを補う必要があると気づいたことは全てメモにとった。

本研究で用いた映像データとは、12ヶ月の乳児が11歳の子どもと遊ぶ様子が映ったものである。“クリップ1”と名づけたこの89秒のデータには、「赤ちゃん」とそれを取り囲む人びとが映っている。クリップ1の現場にいた者は7人(乳児、子ども1〔11歳男児〕、子ども2〔乳児の姉6歳児〕、子ども3〔12歳女児〕、母親3人〔撮影者＝著者を含む〕)である。母親たちは3人とも画面には映らないが、子どもたちと同じ部屋でお茶を飲みながら話をしている。親たちと子どもたちの声は互いに聞こえる位置で、カメラは親たちのいるテーブルの端に

置いてあった。乳児と子どもたちは全員が3メートル以内の範囲内にいる(写真1参照)。

クリップ1映像の内容について簡単に述べる。子ども1(C)が、積木で塔をつくり、それを乳児に倒させたいと思っているのだが、複雑な経緯もあり、乳児にはなかなかそれが通じない。だが、最後はうまくCの希望通り、乳児がCの積木塔を倒したという流れになっている。途中、カメラが回っていることを知らなかったCは、塔に向かって這ってきた乳児を一度とめ、母親である著者にカメラを回すように合図をする。その間に乳児は姉である子ども2のほうに行ってしまう。Cは、自分のつくった塔のほうへ乳児を引き戻そうとしたので、乳児がひっくり返って泣き声を出すという一場面がある。結局、乳児は姉の積木塔を壊したのちに、Cの積木塔へ向かい、塔を壊すところで終了している。



写真1 左端で床にすわっているのが乳児Y、右側に男児C(子ども1)、中央下の青い服の女児が子ども2、奥のソファに腰掛けているのが子ども3である。(男児Cが抱えて乳児の向きを変えようとする直前、指差してCの積木塔を示している)

### 2.2.1 インタビューの手順

次に、実際にインタビューを行なった具体的な手順について述べる。(クリップ1撮影の)現場にいたインタビュー対象者(A、B)に対しては、複数回のインタビューをおこなった。1回目は、乳児の映像を撮影した当日であり、2回目以降はあらかじめ日時を決めて実施した。撮影当日は、著者(吉井)は、カメラマンとして撮影しながら、現場には母親として参加していたので、他の二人の母親に対して、質的調査の手順<sup>18)</sup>にしたがっ

てインタビューを行なった。

インタビューの全体としては、計7名にインタビューを行ない、回数としては10回(計約180分)のインタビューを行なった。日時を決めて行なったインタビューは、8回(A\*, B\*, B\*\*, C, D, E, F, G)だが、このうち、Bの3回目(B\*\*)とF〔非当事者・20代未婚女性保育士〕、G〔非当事者・40代母親〕に対して行なったインタビューは、「赤ちゃん」カテゴリーの用い方について具体的に語ってもらうように導けなかった(これは、インタビュー自体の成否の問題で、このことは今後、本研究の課題として対処していきたい)。したがって、本データとして採用しているものは、対象者として5人(A~E)、トランスクリプトとして7件である(付録 参照)。

A, Bへの2回目とC~Eに対してのインタビューは、次の手順をもって行なった。(クリップ1データは、事前にVHSテープに3回分をコピーし、テレビ画像として、1回流す毎に、リモコンで止めたり、続けたりできるようにしておいた)

- ① インタビューのテーマを説明する(映像のなかの赤ちゃんについて思ったことなどを話してください)
- ② クリップ1の状況を簡単に説明する(子どもたちが積木で遊んでいる。全部で4人、主に2人が画面中央に現れ、赤ちゃんは画面右側から現れるのでちょっと注意して見て下さい)
- ③ クリップ1を1回見せる
- ④ インタビュー対象者の話をきく(相手の話を聞きながら、用意してあった質問を適宜質問する)
- ⑤ クリップ1の2回目を流す(適宜)
- ⑥ インタビュー対象者の話をきく(2度目に見たことで気がついたことがあるかどうかを含めて、話を聞く)
- ⑦ クリップ1の3回目を流す(適宜)
- ⑧ テレビを消して、インタビュー対象者の話を聞くことに集中する(3度目に見たことで気がついたことがあるかどうかを含めて、話を聞く)
- ⑨ クリップに登場する子どもや赤ちゃんから離れて、ふだんインタビュー対象者が赤ちゃんについて思っていることなどを話してもらう

## 2.2.2 調査対象者の選出

特定の乳児が映る映像データを用いる以上、その乳児に関わる人びとと、それ以外の人びととは分ける必要が

ある。そのため、乳児の映像に関わる者(当事者とよぶ)と、関わっていない者(非当事者とよぶ)を、インタビュー対象者としてそれぞれ選出することとした。この場合の当事者とは、映像中で乳児と遊んだ者、乳児の家族、そしてその撮影現場にいた者などが考えられ、本研究では、当事者として、乳児の母親Aとその友人B、乳児と遊んだ男児Cを選択し、インタビュー対象者とした。また、非当事者としては、快諾してくれた著者の知人を選んだ。この場合の非当事者とは、映像の乳児やその家族の知り合いではなく、現場にもいなかった者ということである。このようにして選出した対象者は、以下に記すA~Eの5人ということになった。(現場とは、乳児Yの映像を録画した撮影現場のことである。)

- 当事者 A: 女30代(乳児Yの母親、現場にいた)  
 当事者 B: 女40代(Aの友人、現場にいた)  
 当事者 C: 男児11歳(現場で乳児Yと遊んだ)  
 非当事者D: 女30代(乳児Yを知らない)  
 非当事者E: 男20代(乳児Yを知らない)

尚、分析に使用した事例は、2.2.1で述べた方法によって得たトランスクリプトから、赤ちゃんについて具体的に語っていると思われる部分を抜粋した。

## 2.3 インタビュー・データの作成

インタビュー・データは、インタビュー実施後、録音テープの内容をトランスクリプトの状態に起したものを用了。本データは、会話分析の手法を参考にしているが、会話分析のように、会話の構成や会話の秩序、会話で発せられる音声そのものを分析の対象としているわけではない。むしろ、インタビュー対象者が「赤ちゃん」というカテゴリーをどのように用いているかを探ることに主眼をおくため、会話の音声記述よりも会話で語られていることが明確になる記述方法を用いた。

転記したのちのトランスクリプトは、本研究のデータとして稿末に付録として添付した。本研究は、赤ちゃんを話題とする話の中で、互いに当たり前に受けとめられるであろうものとして語る、その語りの中で「赤ちゃん」という言葉に着目して、この言葉の前後の発話との関わりや会話の一連の流れに注意しながら、カテゴリーとしての「赤ちゃん」がどのようなものかを分析した。その中から重要とみなした点を以下の第3章で述べる。

### 3. 「赤ちゃん」カテゴリーの用いられ方の分析

以下で、収集したデータに基づいて、「赤ちゃん」というカテゴリーがインタビュー対象者A～Eによってどのように用いられているかを分析していく。最初に、サックスの述べたMCDの三つの性質から「赤ちゃん」カテゴリーを検討したい。次に、「赤ちゃん」カテゴリーの特徴と見られるものを幾つか挙げ、「赤ちゃん」カテゴリーがどのようなカテゴリーであるのか、「赤ちゃん」に対して人びとがどのように接しているのかについて、分析から述べられることを考察したい。

#### 3.1 「赤ちゃん」カテゴリーにおけるMCDの性質

MCDにおいて、カテゴリーは(1) “which type set” であるカテゴリー・セットの中で用いられ、(2) “inference rich” という性質をもち、(3) そこに属するどのメ

- 1 そーねー、Cとコミュニケーションとろうとしているんだと思うんです、彼はー、あの赤ち
- 2 ゃんのほうはね、最初は全体のなかに、仲間に入ろうとしててー、次はあのおにいちゃん
- 3 のいうことをやってみようかな(笑)みたいなー、やっぱり全体的に、仲間に入りたいた
- 4 だと思う。あの年上のおにいちゃんとおねえちゃんと。

[トランスクリプトD]<sup>20)</sup>

と発言している。Dはこのとき、映像を見ながらYとそれを取り巻く人びとを説明している。この「年上のおにいちゃん」(4行目)は、映像の中でYと遊んでいるCのことを指しているのは明らかである。Dは、映像に映る

- 12 (省略) 今の子 [=Y] もそうだったけど、ひっぱったりしな
- 13 いでくれという態度をとるけれど、でも結局は、そのなかにいたいわけじゃないですか。
- 14 おにいちゃんたちの仲間に入りたい。

[トランスクリプトD]

と、先に述べた「あの赤ちゃん」(1～2行目)を「今の子」(12行目)と言い換え、「今の子もそうだったけど」と、特定の年齢の子とそれよりも「おにいちゃん」とを並べて、両者の関係を語っている。

一連のトランスクリプトの分析で、他の場合も含め、「赤ちゃん」カテゴリーが「おにいちゃん」カテゴリーと並置されることが多かったのは、インタビュー対象者(A～E)が見た映像(クリップ1)に負うところが多

ンバーもそのカテゴリーの代表者となるという性質がある、とサックスは述べている。この三通りの性質から捉えて、本研究で得られたインタビューの転記データ(トランスクリプト)から明らかになることを順に検討することにした(付録 参照)。

#### 3.1.1 「赤ちゃん」カテゴリーとこのカテゴリーの属するセット

「赤ちゃん」というカテゴリーは、どのようなカテゴリー・セットに属しているのだろうか。ライターは、「赤ん坊」というカテゴリーを、文脈によって《家族の一員》というカテゴリー・セットにも《生涯段階》というカテゴリー・セットにも属しえるものと捉えている<sup>19)</sup>。

分析したデータの中では、「赤ちゃん」が言及される時、「おにいちゃん」「おねえちゃん」というカテゴリーと並んで登場する場合が多かった。例えば、トランスクリプトDにおいて、D(30代既婚女性)は、

YとCの関係が兄弟関係であるかどうかを知ることもなく、両者を「あの赤ちゃん」(1～2行目)と「年上のおにいちゃん」(4行目)と呼んでいる。Dは続けて、

いのではないかと推測される。この映像では、Yと年上の子どもたちの動きに焦点が当てられており、特にYと年長の男児Cの動きが目立っていた。

しかし、「赤ちゃん」カテゴリーと並置されているのは、「おにいちゃん」「おねえちゃん」というカテゴリーだけではない。トランスクリプトEにおいて、やはり映像を解釈しながら、E(20代男性)は、

- 33 赤ちゃんは、大人でも何でも、えーと、ああ、あんまり見たことない：人だなみたいな感じで、  
34 でも遊んでくれるのかなってような感じ、はとれた。

[トランスクリプト E] <sup>21)</sup>

と「赤ちゃん」を「大人」と並べている。さらに、トランスクリプト B では、

- 12 赤ちゃんて目の前にあることだけに関心があり、すぐ忘れてしまうんじゃないかな  
13 ○○ (B が老人介護の仕事をしている施設の名) でも、老人て、目の前にあることだ  
14 けに関心があるんだけど、またすぐそれを忘れちゃうの、それと同じよ。

[トランスクリプト B] <sup>22)</sup>

B (40代母親) は「赤ちゃん」と「老人」を比較対照している。

こうした「おにいちゃん」「おねえちゃん」「大人」「老人」と並べられる「赤ちゃん」は、《赤ちゃん、おにいちゃん・おねえちゃん、大人、老人、等々》というカテゴリ・セットの中に位置づけられると解釈できる。すなわち、「赤ちゃん」は、ここでは、人が生まれてから年を経るに従って呼び名が変わる、その人生の諸段階の呼び名である。このカテゴリは、《生涯段階》というカテゴリ・セットに属していると考えられよう。

《生涯段階》というカテゴリ・セットは、何歳から何歳まで、何十代がどのカテゴリと研究者が任意に割り振ってしまえるようなものではない。これはあくまでも、人びとの日常会話において、社会成員によってその都度、その会話の連鎖の中で適切かどうかに応じて用い

られるものであるとサックスは述べている<sup>23)</sup>。以下のトランスクリプト D からの抜粋では、「赤ちゃん」が「子ども」というカテゴリで言い換えられて (32～33 行目)、さらにその「子ども」が「乳幼児」——このときは、別のカテゴリとして (「乳幼児もそう」 [35 行目] [傍点は吉井による]) —— と並べられる。ここでは、D にとって「赤ちゃん」「子ども」「乳幼児」の各々が何歳から何歳までの範囲なのか、厳密に割り振ることが問題なのではないし、D の発言に矛盾があるかどうか (すなわち、「赤ちゃん」「子ども」「乳幼児」が同一の扱いはできるカテゴリなのかそうではないのか) を問うことが問題なのではない。ここではむしろ、映像を説明する際に、D が「赤ちゃん」「子ども」「乳幼児」のカテゴリから引き出せそうな知識をその都度用いているとみなすことが適切なのではないだろうか。

- 32 多分前へ進んでるだけ。赤ちゃんはこういう感じで、中々振り向かないと思うんですよ  
33 ね。赤ちゃんは前進しかない。子どもって前向きに生きてる。子どもって身体も嫌いだけ  
34 ど、気持ち的にも振り返るのが嫌い。子どもって後ろにフィードバックする記憶ってない。  
35 乳幼児もそう。子どもは、引っ張り戻されるのが嫌い。

[トランスクリプト D]

最後に、ライターが述べた《家族の一員》というカテゴリ・セットについて検討したい。

「赤ちゃん」カテゴリが、もしもその「母親」「父親」と共に参照されるなら、それが《家族の一員》というセットに属するかどうかを検討することは可能である。しかしながら、トランスクリプトの中では、そうした例は見られなかった。これは、インタビュー自体が、映像を参照しつつ行なわれたが、そこに中心的に映っているのが Y と年上の子どもたちであったためと考えられる。

つまり、インタビューの状況そのものが、《生涯段階》というカテゴリ・セットを想起させる可能性が高かったためと推測される。そして、現場の当事者ではなく、従って Y とその他の人びとの関係を知らなかった非当事者の D と E にとっては、とりわけそうであったと考えられる。

唯一の例外が、トランスクリプト A の発言である。それは実の母親で当事者である A (30代母親) によってなされたものである。



3 Yは、私たち家族の言うことは大体わかっていると思う。

〔数分後〕

5 Yはことばは遅いわね、うん、おねえちゃんたちは、このくらいのとき、もう話していたものね。

〔トランスクリプトA〕<sup>24)</sup>

正確に言えば、ここでAは「赤ちゃん」というカテゴリーに言及していないため、これは直接的にこのカテゴリーの分析とはならない。Aの発言の「Y」は、自分の息子の名前であり、個人名である。それに留意した上で、「わたしたち家族」(3行目)「おねえちゃんたちは、このくらいのとき」(5行目)と、ここでは家族の一員としてのYが語られていると言えるだろう。ここでの「おねえちゃんたち」は、“Yより年上の女の子”を指すのではなく、この「家族」の長女や次女を指していると考えられる。

このことから、「赤ちゃん」が《家族の一員》というセットのカテゴリーとして用いられるような場合を調べ

るためには、本研究で扱ったような年上の子どもと一緒に映像や、家族関係のはっきりしない場面の映像を用いるのではなく、人びとが特定の家族や母子関係などを話題にするような場合をさらに調べてみる必要があると推測できる。

### 3.1.2 「赤ちゃん」カテゴリーに蓄積されている知識

「赤ちゃん」というカテゴリーは、“inference rich”だろうか。トランスクリプトの中では、このカテゴリーと共に人びとが「赤ちゃん」についての様々な知識を引き出していることがうかがえる。

12 赤ちゃんて目の前にあることだけに関心があり、すぐ忘れてしまうんじゃないかな

13 ○○(Bが老人介護の仕事をしている施設の名)でも、老人て、目の前にあることだ

14 けに関心があるんだけど、またすぐそれを忘れちゃうの、それと同じよ。

〔トランスクリプトB〕

9 Yちゃん、軽かった：：赤ちゃんって軽くて、ちっちゃいって感じ。

—そう

11 Yちゃんは、いい子だと思う。一緒にいて面白かった。言うことをきいた気がする。言う

12 ことを聞かないときもあったけど・・・

—赤ちゃんって言いたいこと通じる？

14 赤ちゃんは、わかると思う：：ぼくのはわかった感じがする。やめ

15 なんていえば、やめるし：さわるとわかる。ぼくは自分がわかった記憶があるからかも

16 しれないけど、赤ちゃんはわかる、そんなばかじゃないぞと思っている。

〔トランスクリプトC〕<sup>25)</sup>

32 多分前へ進んでるだけ。赤ちゃんはこういう感じで、中々振り向かないと思うんですよ

33 ね。赤ちゃんは前進しかない。子どもって前向きに生きてる。子どもって身体も嫌いだけ

34 ど、気持ち的にも振り返るのが嫌い。子どもって後ろにフィードバックする記憶ってない。

35 乳幼児もそう。子どもは、引っ張り戻されるのが嫌い。

〔トランスクリプトD〕

49 たとえば、こう、抱きかかえたり：：：してみるのでも、どんぐらい力入れていいのかとかが、

50 わかんなくって。やっぱ、すごいみるい[方言=「壊れやすいほど柔らかい」の意]じゃないですか。]

〔トランスクリプトE〕

上の四つのトランスクリプトの抜粋では、映像に映ったYのふるまいを説明するために、「赤ちゃん」について様々なことが語られている。「目の前にあることだけに関心があり、すぐ忘れてしまう」のではないか、「軽くて、ちっちゃいって感じ」「赤ちゃんはわかる」「すごいみるいじゃないですか」といった発言は、そのカテゴリーの特性について語ったものと考えられる。そして、調査者（吉井）が質問したり、コメントを求めたりするインタビューの過程で、その都度引き出されてきたものである。これらから、各々のインタビュー対象者

- 8 赤ちゃんて、Yちゃんもそうだけど、これと見たら一直線にそれに向かう、そしてすぐ  
9 忘れる、そしてまた別の関心に向かってまっしぐら（って感じ）。

〔トランスクリプトB〕

- 9 Yちゃん、軽かった：：赤ちゃんって軽くて、ちっちゃいって感じ。

〔トランスクリプトC〕

- 12 (省略) 今の子 [=Y] もそうだったけど、ひっぱったりしな  
13 いでくれという態度をとるけれど、でも結局は、そのなかにはいたいわけじゃないですか。  
14 おにいちゃんたちの仲間に入りたい。

〔トランスクリプトD〕

これらの発言、「赤ちゃんて、Yちゃんもそうだけど」「Yちゃん、軽かった：：赤ちゃんって軽くて、ちっちゃいって感じ」「今の子もそうだったけど」は、Yという特定の個人と「赤ちゃん」一般とを関係づけている。一方で、Yは、そのメンバーである「赤ちゃん」カテゴリーの下に蓄積されている知識と共に説明されている。他方、Yの様子やふるまいに基づき「赤ちゃん」一般の様子やふるまいが説明されている。ここでは、「赤ちゃん」カテゴリーの下に理解されていることはYにも当然あてはまりうるし、映像から観察されるYの様子やふるまいは「赤ちゃん」の様子やふるまいを代表するものと当たり前にみなされていると言えよう。

### 3.2 「赤ちゃん」カテゴリーの特徴

サックスの述べたMCDの三つの性質から捉えると、ここで分析した人びとの語りからは、「赤ちゃん」カテゴリーが《生涯段階》というセットに属し、その下に蓄積された知識を人びとが用い得るようなカテゴリーであり、映像に映るYという個人をその代表者として扱い得

(B～E)は「赤ちゃん」カテゴリーについての知識を蓄積させていると考えられる。そして、インタビュー過程は、そうした知識を調査者と共有していく過程となっている。

#### 3.1.3 赤ちゃん「カテゴリー」とY

どのカテゴリーに属するどのメンバーも、そのカテゴリーの代表者となるとサックスは述べたが、ここでも、以下の発言が見られた。

るようなカテゴリーであるとみなすことができた。「赤ちゃん」カテゴリーは、しかしまた、MCDの一般的な性質をもっているだけでなく、このカテゴリーに特徴的といえる性質も、幾つか備えているのではないだろうか。

以下では、トランスクリプトにおいて観察されたことの中から、「赤ちゃん」カテゴリーに特徴的と考えられる、(1) 非言語が問題となる、(2) 他人のびとによって非言語行動が代弁される、(3) マージナルである、という点を順に検討したい。

#### 3.2.1 非言語が問題となる

分析したデータにおいて、「赤ちゃん」カテゴリーに対して「わかる」「わからない」という対照的な発言が、各々一例ずつではあるが、見つかった。

トランスクリプトEにおいて、E(20代男性)は、「赤ちゃん」は「わからない」と3回繰り返して述べている。(以下の引用したトランスクリプト内では「わからない」「わかる」を著者が太字にした)

- 42 うん、なんかやっぱ、表情とかで：[赤ちゃんは] なんで笑ってくれているのか、なにで楽しんで  
 43 できているのか、なんか**わかんなくって**：で、やっぱ、喜ばしたいな、と思って遊ぶんだけど：：  
 44 突然泣いちゃったりして：：：で、何が悪くて泣いちゃったのかとかが、**わかんなくって**—  
 —うん  
 46 「慣れてないからっていうのもあるんですけど、ついついこう、僕もおっかなびっくりさわ  
 47 っちゃうんです。」  
 —うん  
 49 たとえば、こう、抱きかかえたり：：：してみるのでも、どんぐらい力いれていいのかとかが、  
 50 **わかんなくって**。やっぱ、すごいみるい[方言=「壊れやすいほど柔らかい」の意]じゃないですか。」  
 51 だからね、こわいんですよね  
 52 えー、ま、うっかり落としたら大変だ ふふ[笑い声] っていうことも思っちゃうし—  
 —あんなちっちゃい子と遊ぶことはあまりないよね  
 54 ないですねー、だから：：えー知り合いの人が、こう抱いてても、僕なんか怖くて、こう抱か  
 55 してってとは言えないですね、抱いてみたいなどは思うんだけど、で：だから、よちよちして  
 56 るのを、遊んだりするのは好きなんですけど—うーんと、抱いたりとか、コミュニケーションが  
 57 へたくそかな、どっちかっていうと、(だけど) いっしょに遊んだりするのは好きなんだよね (笑)。  
 [トランスクリプトE]

ここでEは、「なんかわかんなくって」(43行目)、「わかんなくって—」(44行目)、「わかんなくって」(50行目)と述べている。

一方、トランスクリプトCにおいて、C(12歳男児)は「赤ちゃんはわかる、そんなばかじゃないぞと知っている」(以下、16行目)と語っている。

- 14 赤ちゃんは、わかると思う：： ぼくのはわかった感じがする。 やめ  
 15 などいえば、やめるし： さわるとわかる。 ぼくは自分がわかった記憶があるからかも  
 16 しれないけど、赤ちゃんは**わかる**、そんなばかじゃないぞと知っている。  
 [トランスクリプトC]

EとCとは、「赤ちゃん」が「わからない」か「わかる」かにおいて、全く対照的な発言をしている。そして、述べていることは対照的であるが、その各々の理由の説明に共通するものは、非常に興味深い。

Eは、「なんかやっぱ、表情とかで：[赤ちゃんは] なんで笑ってくれているのか、なにで楽しんでできているのか」(42～43行目)、「突然泣いちゃったりして：：：」(44行目)「おっかなびっくりさわっちゃう」(46～47行目)「抱きかかえたり：：：してみるのでも、どんぐらい力いれていいのかとかが」(49行目)等々、「赤ちゃん」の表情や身体表現(泣く、笑う)、接触の仕方(さわる、抱く)などの非言語コミュニケーションに言及している。そして、「わからない」理由として、「抱いたりとか、コミュニケーションがへたくそかな、どっちかっていうと」(56～57行目)と非言語コミュニケーションのぎこちなさを挙げている。

一方、Cは、「やめなどいえば、やめるし」(14～15行目)「さわるとわかる」(15行目)ということをして、「わ

かる」ことの根拠として挙げている。やめるように言うのは、言語コミュニケーションによってであると考えられるが、それに反応して何かをやめるという「赤ちゃん」の方の行動は、非言語行動である。そして、「さわるとわかる」というのは非言語コミュニケーションである。

『1 はじめに』で述べたように、赤ちゃんと接する場合、わたしたちは成人同士で接する場合と同じように言語を用いることができない。「赤ちゃん」カテゴリーとは、言語を話さないということの特徴とするカテゴリーなのではないだろうか。そして、インタビュー対象者たちにとって、その非言語行動をどう捉えるかによって、このカテゴリーに属するメンバーを理解できるかどうかを裁定せざるを得ないということが、このカテゴリーの重要な特徴となっているのではないだろうか。

「赤ちゃん」カテゴリーに属するメンバーが、自らについて語るということはない。考えてみると、これは人を類型化する上で、特殊な場合だと言えるのではないのか。サックスは、特定のカテゴリーに属するメンバーた

ちが、メンバー以外の人びとによってカテゴリーの下に理解されることに対して、抵抗しようとしたり（「わたしは、『カトリック』だけど、『カトリック』のメンバーの一人が、こんなことをするなんて恥ずかしい」などの発言）、様々な修正を試みようとする（「わたしは『女性』だけど、例外なの」などの発言）例を挙げている<sup>26)</sup>。だが、「赤ちゃん」カテゴリーのメンバーたちは、他者がこのカテゴリーの下に理解したことを発言するのに対し、何ら言い返すことはない。彼らは非言語でしか、他者と関わっていない。

Cの発言が示唆するように、「赤ちゃん」カテゴリーのメンバーたちは、非言語による豊かなコミュニケーションを確かに生み出しているときがある。しかし、このカテゴリーのメンバー以外の社会成員

に、そのコミュニケーションから生み出されるものの類型化を委ねざるを得ないのである。

### 3.2.2 他の人びとによって非言語行動が代弁される

上の3.2.1で検討した「赤ちゃん」カテゴリーの特徴は、このカテゴリーに属するメンバーが他の人びとによって“代弁される”存在であるという特徴と重なっている。「赤ちゃん」カテゴリーのメンバーは、言語を用いないが、それでも3.2.1で示したEやCが語るように、非言語コミュニケーションをとろうとする対象（相手）とみなされている。その上、人びとは、以下の語りの中からうかがえるように、非言語によるそのふるまいや表情が伝えているものを“代弁する”ということを行なっている。

- 8 赤ちゃんで、Yちゃんもそうだけど、これと見たら一直線にそれに向かう、そしてすぐ  
9 忘れる、そしてまた別の関心に向かってまっしぐら（って感じ）。  
10 それで、（姉の）Mちゃんの塔を壊し、ふと見るとCちゃんの塔があるので壊して、  
11 すっきりした、という話よ。

〔トランスクリプトB〕

- 10 やっぱり、強制されると逃げるけど、だけど、だけどやっぱり、あの、本当はこっちに、  
11 仲間に入りたいわけじゃないですか、おっかけると逃げるけどー、自分の好きにやらせと  
12 いてくれという態度をとるけどー、今の子〔=Y〕もそうだったけど、ひっぱったりしな  
13 いでくれという態度をとるけれど、でも結局は、そのなかに入りたいわけじゃないですか、  
14 おにいちゃんたちの仲間に入りたい。

〔トランスクリプトD〕

上の二つのトランスクリプトでは、映像に映る「赤ちゃん」の“心のうち”が語られている。これを語ったBの語り方は、「これと見たら一直線」（8行目）「壊して、すっきりした」（10～11行目）と、「赤ちゃん」の視点に立っている。同様に、Dの「おにいちゃんたちの仲間に入りたい」（14行目）も、「赤ちゃん」の“心のうち”

を発露しているように聞こえる。両者は、自分を「赤ちゃん」の立場に置き換えて、そこから代弁していると見ることができる。

トランスクリプトの中には、さらに、「赤ちゃん」の“頭のなか”を説明するために、自分の幼児期のことを引き合いに出した例が見つかった。

- 14 赤ちゃんは、わかると思う：： ぼくのはわかった感じがする。 やめ  
15 などいえば、やめるし： さわるとわかる。 ぼくは自分がわかった記憶があるからかも  
16 しれないけど、赤ちゃんはわかる、そんなばかじゃないぞと思っている。

〔トランスクリプトC〕

ここで、これを発言したCは、「ぼくは自分がわかった記憶があるからかもしれないけど」（15～16行目）と自分の幼少期に言及し、その「記憶」を証拠として「赤ちゃんはわかる」と語っている。Cがこう語ることに

よって行なっていることは、「赤ちゃん」の代弁となるだけでなく、自分自身が「赤ちゃん」だったときの「記憶」からの証言ともなる。自らは言語によって語ることでできない「赤ちゃん」が「わかる」ということが真実

であることが、このように証言することで強調されている。

非言語行動しか行なわない「赤ちゃん」の“心のうち”“頭のなか”は、他の社会成員によって代弁される。そして「赤ちゃん」カテゴリーのメンバーたちは、その内容を否定したり修正したりはしない。「赤ちゃん」の“心のうち”“頭のなか”は、このメンバーの非言語行動から、他の社会成員たちが、相互に確認しあい、裁定して、

- 12 赤ちゃんて目の前にあることだけに関心があり、すぐ忘れてしまうんじゃないかな  
 13 ○○(Bが老人介護の仕事をしている施設の名)でも、老人て、目の前にあることだけに  
 14 関心があるんだけど、またすぐそれを忘れちゃうの、それと同じよ。

[トランスクリプトB]

本研究で分析したトランスクリプトにおいて、「赤ちゃん」カテゴリーが《生涯段階》というカテゴリー・セットに属するカテゴリーであることは既に検討した。その際、《生涯段階》のカテゴリーとして、他に「おにいちゃん」「おねえちゃん」「大人」といったカテゴリーも言及されていた。しかし、上のトランスクリプトBにおいて、なぜ「赤ちゃん」は「老人」と並べて説明されているのだろうか。

なぜこのトランスクリプトで、「老人」が言及されたのか。もしも「老人」(13行目)という箇所に、代わりに「おにいちゃん」「おねえちゃん」「大人」を挿入した場合、わたしたちはそれをどう聞くだろうか。この発言をしたBは、そのような置き換え文を発言する可能性があるだろうか。インタビューの過程において、Bは敢えて「老人」カテゴリーを引き合いに出して語ったのであり、《生涯段階》の他のどんなカテゴリーでも良かった、ということはあまり考えにくい。Bは、「すぐ忘れてしまう」(12行目)という状態に言及して、「赤ちゃん」カテゴリーと「老人」カテゴリーとを並べている。しかし、それだけが両者の共通項であろうか。

「赤ちゃん」カテゴリーの特徴として、言語を話さないゆえにそのメンバーの非言語コミュニケーションが問題となり、他者に代弁されることもあるという点を挙げた。両者のカテゴリーとしての特徴をここで吟味すると、Bは「老人」の“心のうち”“頭のなか”も、「赤ちゃん」と同じように代弁している。他のメンバーに代弁されるようなカテゴリーであるということが「赤ちゃん」と「老人」で共通に見出される。

わたしたちが特定のカテゴリーのメンバーの“心のうち”“頭のなか”などを代弁することは、もちろん他のカテゴリーにおいても頻繁に行なわれている。「警察も

共有していくものではないだろうか。

### 3.2.3 マージナルである

『3.1 「赤ちゃん」カテゴリーにおけるMCDの性質』においてカテゴリー・セットについて検討した際、以下の抜粋を取り上げた。ここで「赤ちゃん」カテゴリーはなぜ「老人」カテゴリーと並置されていたのだろうか。

ねー 困っているんじゃない?」「大人はね、そういうときでも黙っているものなの」等々の発言は、特定のカテゴリーを対象として、その“心のうち”や“頭のなか”を推測するものである。しかし、上のBの発言では、「赤ちゃん」を「老人」と並べ、「すぐ忘れてしまう」と括ることによって、【発言者】と【「赤ちゃん」「老人」】との関係における非対称性が顕著になっていないだろうか。すなわち、「警察もねー 困っているんじゃない?」といった発言は、推測や同情の表明とはなるが、「警察」というカテゴリーのメンバーたちに代わって発言しなければという必要に迫られて発言されるのではない。そして、最終的には、「警察」カテゴリーのメンバーたちが“自分たちの”“本当の”“心のうち”“頭のなか”を語り、訂正したり修正したりできるものとして発言されているのではないか。それに対して、「赤ちゃん」や、トランスクリプトBにおける「老人」は、それ以外の社会成員が理解し代弁しなければならないカテゴリーとして扱われているのではないだろうか。解釈をやや広げると、社会成員としての発言者は、社会においてマージナルな者としての「赤ちゃん」「老人」に言及しているのではないだろうか。

わたしたちの社会においては、すべての成員が社会的、言語的、そして日常会話の連鎖の中で、自動的に成員としてみなされるということはない<sup>27)</sup>。しかし、仲間に入れないで‘外部’で待たせておくというわけでもない。言語を話さなかったり、他者による世話が必要であったり、社会成員に代弁してもらわなければならないカテゴリーのメンバーたちは、マージナルな存在として、完全な資格を留保したまま、社会に存在することになる。「赤ちゃん」カテゴリーは、言語を話さず、他の人びとにその非言語行動が代弁されなければ理解されな

い、という性質をもち、それゆえそのメンバーたちはマージナルな存在とみなされているのではないだろうか。そして社会成員が理解しケアしなければならないがゆえに、同じくマージナルな「老人」カテゴリーと並置されたのではないだろうか。

### 3.3 人びとにとっての「赤ちゃん」

ここで、これまでの分析をまとめて、「赤ちゃん」カテゴリーがインタビュー対象者たちにとってどのようなものであったかを整理してみたい。その上で、日常生活世界における「赤ちゃん」についての人びとの理解の仕方について、分析から述べられることを考察したい。

『3.1 「赤ちゃん」カテゴリーにおけるMCDの性質』において、「赤ちゃん」カテゴリーについて、サクスの提唱したMCDの三つの性質から検討した。本研究の分析のために用いたトランスクリプトにおいて、「赤ちゃん」カテゴリーは、《生涯段階》というセットに属し、A～Eのインタビュー対象者はこのカテゴリーからインタビュー過程で必要となった知識をその都度引き出していた。そして彼らは、映像に映るYという個人を「赤ちゃん」カテゴリーの代表者として扱っているとみなすことができた。

『3.2 「赤ちゃん」カテゴリーの特徴』では、トランスクリプトの中からうかがうことができ、「赤ちゃん」カテゴリーの特徴として重要と考えられる三つの特徴を検討した。最初に、「赤ちゃん」が言語を話さないことから非言語が問題となり、他の社会成員が「赤ちゃん」の非言語行動をどう捉えるかによってこのカテゴリーが

「わかる」「わからない」が裁定されるのではないかと考えた。次に、「赤ちゃん」のこの非言語行動から、インタビュー対象者たちが「赤ちゃん」の“心のうち”や“頭のなか”を代弁していることを指摘した。言葉を持たないがゆえにこれらのことが生じている「赤ちゃん」カテゴリーは、社会成員が用いているカテゴリーの中でも、特殊なものでないかと考えられる。最後に、他の社会成員が理解し代弁していくというこうした特徴ゆえに、「赤ちゃん」は社会においてマージナルな存在として扱われているのではないかと推測した。

これまでの分析で示唆したカテゴリーの特徴を挙げるだけに留めるならば、「赤ちゃん」のメンバーたちを、他の社会成員の言語化によって自らを代弁してもらい、このカテゴリーの下に理解してもらうだけの、何ら“主体性のない存在”として描いてしまったことになるかもしれない。インタビュー対象者たちが映像で目にしたYは、確かに、非言語行動しかしない存在であった。そして、こうした非言語行動を他の社会成員である対象者たちが言語化したことによって、「赤ちゃん」は一つのカテゴリーとしてわたしたちに共通の理解が可能なものとなった。そして、カテゴリーやその下にある知識を、社会成員たちが言語によって共同で構成していく過程がなければ、わたしたち一人一人が「赤ちゃん」についての体系的な理解の仕方を身につけ、維持していくのは難しいだろう。しかしまた、「赤ちゃん」が非言語行動しかしないということは、「赤ちゃん」が“主体性のない存在”である、ということとは全く違う。

- 42 うん、なんかやっぱ、表情とかで：[赤ちゃんは] なにで笑ってくれているのか、なにで楽しんで  
 43 でくれているのか、なんかわかんなくって：で、やっぱ、喜ばしたいな、と思って遊ぶんだけど：：  
 44 突然泣いちゃったりして：：：で、何が悪くて泣いちゃったのかとかが、**わかんなくてー**  
 [トランスクリプトE]

上の発言に見られるように、インタビュー対象者Eは、「赤ちゃん」についての知識をその非言語行動から常に修正せざるを得ないことも、知識としてもっている。日

常生活において、「赤ちゃん」の非言語行動を通して、わたしたちはこのメンバーについて“知る”のである。

- 55 (省略) 抱いてみたいなどは思うんだけど。で：だから、よちよちして  
 56 るのを、遊んだりするのは好きなんですけどーうんと、抱いたりとか、コミュニケーションが  
 57 へたくそかな、どっちかっていうと、(だけど) いっしょに遊んだりするのは好きなんだよね(笑)。  
 [トランスクリプトE]

- 14 赤ちゃんは、わかると思う：： ぼくのことはわかった感じがする。 やめ  
 15 などいえば、やめるし： さわるとわかる。 ぼくは自分がわかった記憶があるからかも  
 16 しれないけど、赤ちゃんはわかる、そんなばかじゃないぞと思っている。

[トランスクリプトC]

これらの二つのトランスクリプトのEとCは、「赤ちゃん」カテゴリーのメンバーたちをコミュニケーションの相手とみなしていた。非言語コミュニケーションは、話しことばに付随し、それを修飾するもの、とみなされることが多いが、中にはそれ自体でその人の態度、個性、感情などを伝達する場合もある。そして時には、言語以上に強力に意思や感情を伝達すると言われている<sup>28)</sup>。わたしたちは、日常世界の現場において、「赤ちゃん」のメンバーたちの非言語行動を通して、このカテゴリーについての理解を常に修正していく。

しかしまた、そのような非言語コミュニケーションにおいても、「赤ちゃん」はマージナルな存在とみなされているのではないだろうか。わたしたちは「赤ちゃん」に“ヒト”としての属性を付与する一方で、社会成員としての十全な資格があるというよりは、その“候補者”とみなしているのではないかと<sup>29)</sup>。分析において、「赤ちゃん」の“心のうち”“頭のなか”が代弁されていることを示したが、それと同時に「赤ちゃん」を「老人」と並べた発言について、両者がマージナルな存在として言及されているのではないかと推察した。「赤ちゃん」の“心のうち”“頭のなか”は、わたしたち社会成員と同一のものとして扱われているのだろうか。それとも、わたしたちとは異質の、わたしたちに理解できるかできないかの点で境界線上にある何者かとして、扱われているのだろうか。

「赤ちゃん」カテゴリーについてのこうした疑問を今後さらに探ることによって、このカテゴリーについてのわたしたちの理解の仕方を、より明らかにしていくことができるだろう。わたしたちは「赤ちゃん」に対して、《わたしたちと変わらない》何者かとして話しかけることもあれば、《わたしたちのようになりつつある》何者かとみなすこともあるだろう。また、《わたしたちとは違う》存在として接することもあるのではないかと。少なくとも、“心のうち”“頭のなか”を自ら言語化しない「赤ちゃん」という存在に対して、わたしたちは自らの側から多くのことを付与せざるを得ない、と言えるのではないだろうか。わたしたちがどのような状況でこういった属性を付与しているのかを探ることによって、「赤ちゃん」というカテゴリーについてさらに多くのことが明らかになると考えられる。

#### 4. おわりに

インタビューを実施するにあたっては、現場の文脈は非常に重要である。本研究でのインタビューの現場は、同じ映像を使ったため、3.1でも述べたように、映像に負ったカテゴリーの用いられ方が現れたと考えられる部分があった。すなわち、ここで《生涯段階》というカテゴリー・セットに属したカテゴリーが現れたことは、「おにいちゃん」と「赤ちゃん」が映っていると思われる映像であったことと関係していると考えられ、このことは、人びとによる「赤ちゃん」カテゴリーの用いられ方を調査するにあたっては、重要な反省点となった。また、対象者についても、分析に使用したものは5人であって、それぞれの経験も異なるという状況になってしまった。他の成人男性を対象者にした調査や、育児経験との関係からの対象者の選択など、どのような条件を考慮して今後のインタビューに活かすべきかに関し、吟味すべき点が多く残されている。今後は、インタビューに際しての諸条件を統制・補足し、さらに緻密な吟味を加えるべきであると考えている。日常のなかでの「赤ちゃん」カテゴリーの研究をさらに深めていくために、多くの課題をひとつずつこなしていきたい。

「赤ちゃん」カテゴリーの研究で見えてきたことの中には、「赤ちゃん」の非言語コミュニケーションや「赤ちゃん」のマージナルである社会的立場など、興味深い視点もあった。境界線上のカテゴリーとして「赤ちゃん」カテゴリーは興味の尽きることがなく、今後も引き続き研究を続けていきたい。

#### 謝辞

本研究を行なうにあたって、多くの助言と励ましをいただいた寺田光孝教授、不出来な学生を諦めず指導し続けてくださった武者小路澄子助教授に心から感謝を申し上げます。この場を借りて御礼申し上げます。

#### 註・参考文献

- 1) 乳児の研究の傾向については、正高信男の著作で詳

細に述べられている。

「人の乳児・幼児の言語発達の研究の現在に至る概要を調べてみて驚いた。膨大な量の教科書・通俗書・学術論文が刊行されているにもかかわらず、九分九里が満一歳以降の、大人にも意味のわかる単語を話しはじめてからの子どもの発達について、記述しているのである」(正高信男. ことばの誕生—行動学からみた言語起源論. 東京, 紀伊国屋書店, 1991, p.125-126.)

- 2) 麻生武. 身ぶりからことばへ—赤ちゃんにみる私たちの起源. 東京, 新曜社, 1992.
- 3) やまだようこ. ことば前のことば. 東京, 新曜社, 1987.
- 4) モリス, デズモンド. 赤ん坊なぜかわいい? 寺田敦子訳. 東京, 河出書房新社, 1995.
- 5) 正高信男業績 (京都大学霊長類研究所 HP)  
<http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/report/2001tenken/MASA.HTM>
- 6) バーガー, P. L., ルックマン, T. 日常世界の構成: アイデンティティと社会の弁証法. 東京, 新曜社, 1973.
- 7) ガーフィンケル, ハロルド. エスノメソドロジー: 社会学的思考の解体. せりか書房, 1987.
- 8) Sacks, Harvey. Lectures on Conversation. Vol. I Oxford, Blackwell. 1992. (ed. by Gail Jefferson)
- 9) 現場(フィールド)で“自然な状況で”人びとが語ることをデータとして収録することはできるのか。“自然な状況で”データを収集するためには、個々の人びとの生活世界に“自然に”潜入し、家族の団欒といった“自然な”状況でデータを収集することが望ましいと言えるかもしれない。本研究では、しかしながら、そのような収集方法においても、人びとが語る場面に録音機材を設置し、家族の一員としてではなく“調査者として”語りを収集することは免れないのであれば、それよりも複数の人びとの語りを収集し相互に比較分析することが、「赤ちゃん」というカテゴリーの分析において優先事項となると考え、インタビュー形式でのデータ収集を選択した(『第2章「赤ちゃん」についての語りのデータの作成」参照)。赤ちゃんのいる現場を録画した映像を人びとに見てもらいながら、彼らがそこに映っている赤ちゃん(Y)や赤ちゃん一般について語ることを録音・転記してデータとすることにした。語ってくれた人びとの中には、実際に現場にいた人もそうでない人もいたが、現実の赤ちゃんが動き回る映像

を見ながら語ることによって、抽象的な赤ちゃん概念ではなく、その場で目にする赤ちゃんを参照しながら語ってもらおうと努めた。また、インタビューにおいては、できる限りリラックスした日常的な会話を心掛け、人びとが「赤ちゃん」について当たり前前に語ることを、そのまま聞くことを試みた。

従って、本研究で分析する人びとの語りは、調査者(吉井)が非統制(すなわち、自由形式)のインタビュー形式で語ってもらったインタビューで生じたものとして位置づけられる。インタビューの過程とは、「インタビュアーと語り手の共同的な構築過程である」(桜井厚. インタビューの社会学: ライフストーリーの聞き方. 東京, せりか書房, 2002.)。その意味で、本研究で明らかにできる「赤ちゃん」カテゴリーについての知見は、上述のようなインタビューの文脈において“自然な状況”で得られた語りに基づく知見である。調査者が収集したデータやその分析における“自然さ”やその問題、それらに対するリフレクシヴな(自己参照的)な視点のあり方については、武者小路澄子の論文で述べられている。(Mushakoji, Sumiko. The Process of Knowledge Construction: A Triple Parallel Wrighting of Science, Sociology of Scientific Knowledge and a Candidate PhD Thesis. Loughborough University, 1999.)

- 10) Sacks, Harvey. Lectures on Conversation. Vol. I & II. Oxford, Blackwell. 1992. (ed. by Gail Jefferson)
- 11) 阿部は、会話分析において、話者の属性を匿名化した語りのデータから<子ども>らしさを見つけることができるかという問いを吟味している。そこでの関心は、そこで会話という相互作用を行なっている当事者たちの間に、<大人—子ども>という非対称性が見出せるかという点であり、「子ども」というカテゴリーへの言及ではなく、会話の相互作用に着目した分析がなされている。(阿部耕也, “<子ども>の見つけ方”. 好井裕明ほか編. 会話分析への招待. 東京, 世界思想社, p. 101-123.) 本研究は、それに対して、「赤ちゃん」というカテゴリーの用い方に着目した分析を行なう。
- 12) ライター, K. エスノメソドロジーとは何か. 東京, 新曜社, 1987.
- 13) 大谷信介ほか. 社会調査へのアプローチ: 論理と方法. ミネルヴァ書房, 1999, P. 191.
- 14) フリック, ウヴェ. 質的研究入門: <人間の科学>のための方法論. 春秋社, 2002. (An introduction to qualitative research. By FLICK Uwe)



- 15) 大谷信介ほか. 社会調査へのアプローチ:論理と方法. ミネルヴァ書房, 1999, P. 197.
- 16) 本稿で用いた「乳児の映像」は, 著者の乳児コミュニケーション研究の一部としてすでに発表したものである。2004年3月27日, 28日, 社会言語科学会(The Japanese Association of Sociolinguistic Sciences) 第13回大会において研究発表時に提示。発表論文(吉井均枝. 子どもの言語発達における模倣の可能性.) は, 社会言語科学会第13回大会発表論文集 p29-32 に掲載。
- 17) 佐藤郁哉. フィールドワーク:書をもって街へ出よう。東京, 新潮社, 1992. p. 40-45.
- 18) 質的調査の一つである参与観察法とは, 問題関心を抱いた集団などに, メンバーとして参与しながら, 観察を行なう調査技法のことである。著者(吉井)は, 現場に母親として参与し, 参与観察法の手順に従い, 当事者として現場の記録を採った。(大谷信介ほか. 社会調査へのアプローチ:論理と方法. ミネルヴァ書房, 1999, p. 195.)
- 19) ライター, K. エスノメソドロジーとは何か. 東京, 新曜社, 1987.
- 20) トランスクリプトDは, 2004年11月2日に実施したインタビューよりの抜粋。
- 21) トランスクリプトEは, 2004年10月30日に実施したインタビューよりの抜粋。
- 22) トランスクリプトBは, 2004年6月4日に実施したインタビューよりの抜粋。
- 23) Sacks, Harvey. Lectures on Conversation. Vol. I & II. Oxford, Blackwell. 1992. (ed. by Gail Jefferson)
- 24) トランスクリプトAは, 2003年3月26日に実施したインタビューよりの抜粋。
- 25) トランスクリプトCは, 2004年10月16日に実施したインタビューよりの抜粋。
- 26) Sacks, Harvey. Lectures on Conversation. Vol. I & II. Oxford, Blackwell. 1992. (ed. by Gail Jefferson)
- 27) Edwards, Derek. Discourse and Cognition. London, Sage, 1997.
- 28) ヴァーガス, マジョリー F. 非言語コミュニケーション. 石丸正訳. 東京, 新潮社, 1987.
- 29) Edwards, Derek. Discourse and Cognition. London, Sage, 1997.

(平成18年3月31日受付)

(平成18年6月29日採録)

## 付録 インタビューのトランスクリプト

記述にあたっては、『山崎敬一、西阪仰編、語る身体・見る身体：〈附論〉ビデオデータの分析法、ハーベスト社、1997.』を参照した。トランスクリプト中の（ ）の内には、聞き取れなかった場合の注釈を加えた。これは、データ採集の直後に、前後から意味をくみ取り、追記したものである。また、：：(コロンの列)は、直前の音が延ばされていることを示す。

本文で抜粋したトランスクリプト部分については斜体で記述した。

### インタビュー1 (トランスクリプトA)

対象者：30代母親 (A)

日時：2003年3月26日〔クリップ1撮影当日〕

場所：対象者と著者の共通の友人宅

形式：著者が、対象者の第3子Y (12ヶ月児) を撮影する合間に質問する形で行なった。

状況：午後4時近くなり、対象者の子である乳児Yの昼寝の時間が近づきつつあり、最小限の時間で、「乳児の映像」を著者が録画するなかで、その母親である対象者にリラックスしてもらうために、雑談の形で、インタビューを実施した。著者と対象者は、面識はなかったが、友人を介して録画の許可を得てあった。友人宅への訪問は乳児を考慮し、全部で1時間半以内に切り上げられた。そのなかでは乳児の母親である対象者には、じゅうぶんな質問時間はとることはできなかったかもしれない。会話は、自然にまかせると、対象者と友人との共通の話題へと移ることが多く、乳児に関する語りは少なかった。

対象者には、Yの上に6歳、12歳の娘がいる。

選択事由：Aをインタビュー対象者として選択したのは、何よりも乳児の母親であり、著者と面識がないことで、先入観なく乳児の語りを観察することができるのではないかと考えた。

時間：B宅に滞在中の計1時間半のうちの約数分間

概要：Y児の日常について述べている。泣くこともあるが困らせる子ではない。ことばがわかるかどうかについても述べている。

トランスクリプト字数：137字

トランスクリプトAの抜粋根拠：対象者は、第1子 (Yの長姉12歳) の友人 (子ども3) とその母親が同席している状況のなかでは、第1子やその学校についての話題が中心となっていた。そのなかで、乳児Yの話題になったとき (開始から約20分後) にまとめて語った部分を抜粋した。

### トランスクリプト1 (トランスクリプトAを含む)

- 1 Y (自分の1歳の息子) は思い通りにならないと泣くわね
- 2 眠い、お腹すいた以外はぐずることもない、お腹いっぱいだと全然困らせることはない
- 3 Yは、私たち《家族》の言うことは大体わかっていると思う。

〔数分後〕

- 5 Yはことばは遅いわね、うん、おねえちゃんたちは、このくらいのとき、もう話していたものね。

〔15分ほど経過〕

一家族のなかではYちゃんはどんな風なんですか？

- 7 おねえちゃんたちがよく面倒をみってくれるし、
- 8 Mがよくあそんでくれるの

一下のおねえちゃんと仲がいいんだ

9 そうですね

## インタビュー 2

対象者：30代母親（A）

日時：2004年6月4日（前回のインタビューから1年2ヵ月後）

場所：対象者と著者の共通の友人宅（友人が転居したため、前回と同じ家ではない）

形式：友人（B）を含めて、著者を含めて3人の自由回答形式。

状況：お茶を飲みながら、近況などを語り合う雑談から始まり、気持ちがほぐれたと思われる約30分後に、1分半の映像（クリップ1）を流し、この前後からインタビューを開始した。このとき2歳になったYも連れてきていた。対象者は、Bとは、12歳の娘同士が同じ中学校に通うという関係である。

選択事由：前回のインタビューにおいて、じゅうぶんな時間がとれなかったためにそれを補うことと、当時の映像を見ることによって、現場での聞き取りとは違う、当事者の「語り」が得られることを期待した。

時間：対象者が、B宅に滞在中の約30分のうちの約15分間

概要：対象者は、Bとともに、互いの娘に関する話題が多かったが、映像データ（クリップ1）を流すことを著者が話題にした後には、友人とともに乳児Yについて語り始めた。クリップ1映像の撮影日のことや印象を述べている。インタビュアー（著者）に聞かれ、クリップ1のストーリー解釈や登場人物（主に男児C）の印象について述べている。

トランスクリプト字数：718字

## トランスクリプト 2

—撮影した日のことは覚えていますか？ どんな印象がありますか

2 いつもと同じ日常でしたね

—あのころのYちゃんのこと覚えていますか

4 Yは小さかったんだなあ。可愛かったんだね。

5 でもYのいうことは全然わからない：ふふ [笑い声]

[録画映像1を流す準備、テレビ、ビデオデッキなどの操作]

[クリップ1映像を2回流す]

—Yちゃんがかすかに手を振り払うように見えるのですが、この動きをどう思いますか？

13 意思のある動きであって、意味なく手をあげたのではないと思う。うん

14 うん、拒否の意思をもった行為だね[Bとうなづき合いながら]

—どんなことが起こっているのかしら？

[クリップ1映像を1回流す]

16 YちゃんがCの積木の塔に気づいて近寄ってきた。[Bとうなづき合いながら]

17 そこへCが現われたのでCが何を言いたいのか、何

18 をしているかに気をとられていたが、ふと姉（M）のつくった積木の塔に気づいて

19 それを倒しに行こうとした。姉は止めようとして「どっちがいい？」

—どっちがいい？の「どっち」って何と何をさしているのでしょうか？

21 この意味が、どっちの塔がいいか聞いているということは一目瞭然だよな [Bとうなづき合いながら]

22 [Cと姉は]どっちというけれど、Yちゃんの関心は姉の塔にすでに決まっている

23 それで姉の塔を壊し、ふと見るとCの塔があるので壊してすっきりした [Bとうなづき合いながら]

—赤ちゃんの行動ってどんな感じ（ですかね）

25 Yは私の言うことはわかるけど、Yの言うことは、わからない

—C児の印象ありますか？

27 ふつうの男の子 特別な印象はない(けど)：：

—Cのしゃべり方をどう思う？

29 このくらいの年の子はみんなこんな感じじゃない？

—自然ということ？

31 しぜんだと思う

—話しかけ方についてはどう思いますか？

33 しぜん。まったくふつう。よくみる感じ。不自然とはぜんぜん思わない

### インタビュー 3

対象者：40代母親(B)

日時：2003年3月26日〔撮影当日〕

場所：対象者の自宅

形式：著者が、乳児Yを撮影する合間の、自由な語りを転記する形となった。

状況：乳児の撮影そしてインタビューのための場所を提供してくれた本人である、対象者は、子どもたちのおやつや母親たちのお茶のしたくなど、いろいろ気を使うなかでのインタビューとなった。会話は、客であるAの関心事が中心となりがちで、乳児Yや赤ちゃんに関する語りは少なかった。AとBは、12歳の娘同士が同じ中学校に通うという関係なので、彼女らの話題は、そのことが多かった。

選択事由：Bをインタビュー対象者として選択したのは、撮影現場にいた当事者であり、また、わずかながらでも、事前に乳児Yの存在を知っていた者として、その語りに関心があったからである。

時間：B宅に著者が滞在中の約1時間のうちの約15分間

概要：撮影現場での乳児Yの行動について述べている。

トランスクリプト字数：55字

### トランスクリプト 3

- 1 Yちゃんは〇〇(Bが飼っているペットの犬の名)が好きな場所(瓶などがまとめて置いてあるコーナー)に行きたがるね

### インタビュー 4 (トランスクリプトB)

対象者：40代母親(B)

日時：2004年6月4日(前回のインタビューから1年2ヵ月後)

場所：対象者Bの自宅

形式：インタビュー対象者A、Bが同席した形での、自由回答式。

状況：お茶を飲みながら、近況などを語り合う雑談から始まり、気持ちがほぐれたと思われる約10分後に、1分半の映像(クリップ1)を流し、この前後からインタビューを開始した。AとBは互いにうなずきあいながら、回答していた。

選択事由：Bをインタビュー対象者として選択したのは、撮影現場で、実際に乳児を見ている当事者であり、また、わずかながらでも、事前に乳児Yの存在を知っていた者として、その語りに関心をもったからである。

時間：B宅に著者が滞在中の約1時間のうちの約15分間

概要：クリップ1の映像を見て、ストーリーやYの行動の解釈を述べている。後半では、乳児の行動が老人と似ていると述べる。

トランスクリプト字数：521字

トランスクリプトBの抜粋根拠：AとBが同席しているので、語りは共通の話題（乳児の姉たちの話題）が多かったが、映像データ（クリップ1）を流すことを著者が話題にした後には、友人とともに乳児Yについて語り始めた。よって、その前後部分を抜粋した。

トランスクリプト4（トランスクリプトBを含む）

—あこのころのYちゃんのこと覚えていますか

- 1 Yちゃんかわいかった
- 2 S[子ども2, Bの12歳の娘]は、楽しかったと言っていた

[クリップ1映像を2回流す]

—どんなことが起こっていると思いますか？

- 1 YちゃんがCちゃんの積木の塔に気づいて近寄ってきた。そこへCちゃんが現われたので
- 2 Cちゃんが何を言いたいのか、何をしているかに気をとられていたが、ふと姉のつくった
- 3 積木の塔に気づいてそれを倒しに行こうとした。(姉の)Mちゃんは止めようとして「ど
- 4 っちがいい？」と聞いたのよね。

—この意味は、どっちの塔がいいのか聞いているということ？

- 6 そう、それは一目瞭然よね。
- 7 Yちゃんの関心は(姉の)Mちゃんの塔にすでに決まっているのよ。
- 8 赤ちゃんて、Yちゃんもそうだけど、これと見たら一直線にそれに向かう、そしてすぐ
- 9 忘れる、そしてまた別の関心に向かってまっしぐら(って感じ)。
- 10 それで、(姉の)Mちゃんの塔を壊し、ふと見るとCちゃんの塔があるので壊して、
- 11 すっきりした、という話よ。
- 12 赤ちゃんて目の前にあることだけに関心があり、すぐ忘れてしまうんじゃないかな
- 13 ○○(Bが老人介護の仕事をしている施設の名)でも、老人て、目の前にあることだ
- 14 けに関心があるんだけど、またすぐそれを忘れちゃうの、それと同じよ。

## インタビュー5（トランスクリプトC）

対象者：12歳男児（クリップ1の中のC）

日時：2004年10月16日（Yの撮影から1年半後）

場所：Cの自宅（Cの母である著者宅）

形式：Cのインタビューは、ふだんの親子の会話よりは、フォーマルな態度で行なったが、Cが必要以上に緊張しないように努めた。〈1対1〉の質問形式だが、会話的な状態で行なった。

状況：1年半前にB宅に、母親がCとともに出かけた際には、ただ遊びに行くのだと理解していたと思われるが、赤ちゃんの研究のために、カメラを回しているのだということは、著者が現場でも何度か言ったので、それなりに理解していると思われる。このインタビューのときまで、撮影のときの話をしたことはなかったが、母親が自宅で何度もクリップ1テープを流していることには気づいていた。話題にしたのは、この日が初めてで、撮影日のことやYのこと、赤ちゃんのことをインタビュー形式で質問した。Cはこのとき12歳だが、乳児Yと遊んだ撮影時から1年半すぎた時期のインタビューである。Cにはきょうだいはなく、親戚にも乳幼児はいない。

選択事由：Cをインタビュー対象者として選択したのは、撮影現場で、実際に乳児と遊んだ当事者のインタビューは必要であると考え、また、経験は少ないながらも12歳児として、「赤ちゃん」をどのように語るかに、関心があったからである。

時間：約30分間

概要：クリップ1の現場で遊んだことを思い出しながら、積木をつんでどうしたかったか、乳児Yをどう思ったか、さらに自分の幼児期のことなどを述べている。

トランスクリプト字数：991字

トランスクリプトCの抜粋根拠：Cが、Yや赤ちゃんについて語る部分に加え、自己の幼児期について語っている部分をすべて抜粋した。

#### トランスクリプト5（トランスクリプトCを含む）

－Yちゃんと遊んだ日のこと覚えている？

- 1 小さいころ遊んだことあるSちゃんとSちゃんのママに会ったこととー、
- 2 Yちゃんと女の子（Yの当時6歳の姉）と遊んだね。
- 3 積木で遊んだ。Sちゃんはおとなしくなった。
- 4 積木をすごく高く積んだから、すごいだろってママに見せたかった。

－Yちゃんのこと覚えている？

- 1 Yちゃん楽しそうだった。おれも楽しかった。（Yちゃんは）ケージに入ろうとしていた。
- 2 Yちゃんゴジラが気に入っていた。

－ゴジラって積木を倒すこと？

- 4 積木を倒す役のことだよ
- 5 積木っていうか、かるたみたいのだったでしょ。だから、高く積むのが大変だった。だけど、工夫したからうまくいった：2枚ずつ重ねたんだけどね：だから倒れるときYちゃんにぶつかりそうで心配だった。

－赤ちゃんどう思う？

- 9 Yちゃん、軽かった：赤ちゃんって軽くて、ちっちゃいって感じ。

－そう

- 11 Yちゃんは、いい子だと思う。一緒にいて面白かった。言うことをきいた気がする。言う
- 12 ことを聞かないときもあったけど・・・。

－赤ちゃんって言いたいこと通じる？

- 14 赤ちゃんは、わかると思う：ぼくのはわかった感じがする。やめ
- 15 なんていえば、やめるし：さわるとわかる。ぼくは自分がわかった記憶があるからかも
- 16 しれないけど、赤ちゃんはわかる、そんなばかじゃないぞと思っている。

－ほかに何を覚えている？

- 17 トイレにいった。UNOをしてあそんだんだけど、MちゃんやSちゃんはつよかった。
- 18 おれは負けてばかりだった。おやつがまずかった。

－YちゃんがMちゃんの積木のほうに行きたがったの覚えている？

- 20 おぼえてない：おれはつみきをつむのにいっしょけんめいだったから。

[クリップ1映像を流す]

- 21 [ビデオを見て] じぶんのこえがへんだー。ママにばかみみたいなこといってる：ん
- 22 こっちみてとか じぶんのいってることやじぶんのかっこうがやだ。

－言い方がH〔Cの従兄〕に似てない？

- 24 えー？にてるかどうかなんて知らない。どうでもいいけど：

－自分が赤ちゃんだったときのことは覚えている？

- 26 テレビをよくみていた  
27 赤ちゃんってなんさいまでのこと？  
—2才くらいかな  
29 レゴやってたのはいつ？ あれは3歳か？  
—小さいころ遊んでくれた人は誰だった？  
31 ママ、パパ、ジージ、バーバ、H（従兄）  
32 ようちえんのマキせんせいがてじなをした  
33 つみきあそびをよくした

## インタビュー6（トランスクリプトD）

対象者：30代既婚女性（D）

日時：2004年11月2日

場所：著者宅

形式：〈1対1〉での自由回答形式だが、会話的な状態で行なった。

状況：乳児Yや男児，その他の映像登場者と面識はない。子育ての経験はない。それほど年の離れていない弟がふたりいる（下の弟とは6歳違い）。著者宅へ遊びに来た機会に，協力を依頼し，快諾を得た。

選択事由：Dをインタビュー対象者として選択したのは，乳児の映像（クリップ1）に無関係，すなわち非当事者であり，著者の前で比較的リラックスしながらインタビューに答えてくれそうな人ということで選択した。Dは著者の遠い親戚で，ふだんそれほどつき合いはないが，手紙などで良い関係を保っている人物である。

時間：約30分間

概要：クリップ1の登場人物の行動についての解釈を述べ，赤ちゃんについて思っていることを語り，赤ちゃんは仲間に入りたがっていると述べる。

トランスクリプト字数：1511字

トランスクリプトDの抜粋根拠：Dが。Yや赤ちゃんについて，そして自分の幼児期について語る部分を抜粋した。

## トランスクリプト6（トランスクリプトDを含む）

〔クリップ1映像1回目を流す〕

—乳児Yは何をしているのか

- 1 そーねー，Cとコミュニケーションとろうとしているんだと思うんです，彼はー，あの赤
- 2 ちゃんのほうはね。最初は全体のなかに，仲間に入ろうとしてー，次はあのおにいちゃん
- 3 のいうことをやってみようかな（笑）みたいなー。やっぱり全体的に，仲間に入りたいん
- 4 だと思う。あの年上のおにいちゃんとおねえちゃんと。

—乳児YとCはかみ合っていますか

- 5 そーねー，最終的には〔YとCは〕かみ合っていると思う，言ってることに反応して
- 6 るから，赤ちゃんのほうが。もちろんーCのほうはー，赤ちゃんのほうへ自分から接近し
- 7 てるけれどもー。赤ちゃんのほうからするとー，そーねー，最終的には相手の言ってるこ
- 8 とを理解しているか，理解しようとしてるか，応えようとしてるかなー，意思に，Cの意
- 9 思に応えようとしてるかな。

—赤ちゃんについて思ったことなどありますか

- 10 やっぱり，強制されると逃げるけど，だけど，だけどやっぱり，あの，本当はこっちに，
- 11 仲間に入りたいわけじゃないですか。おっかけると逃げるけどー，自分の好きにやらせと

- 12 いてくれという態度をとるけどー、今の子 [=Y] もそうだったけど、ひっぱったりしな  
 13 いてくれという態度をとるけれど、でも結局は、そのなかにはいたいわけじゃないですか。  
 14 おにいちゃんたちの仲間に入りたい。

[クリップ1映像2回目を流す]

- 15 好奇心ですね、やっぱ、最初積木つんでたじゃないですか。向こうの女の子と、Cと。  
 16 それ見て、動いているじゃないですか。仲間に入りたいのもあるけど、積んでることに対  
 17 する好奇心なのかな  
 18 [Yがひっくり返ったのは] 自分が低い方の積木に向かおうとしてるのを、後ろから  
 19 こうやられたからじゃないかと思う。こっち向けみたいな、多分あの時点で、ハイハイの視  
 20 点から見ると、あの低いほうの一、(積木塔)で女の子の方が積木さわってたから、動く  
 21 ほうに目が行っちゃうし、低い方にやっぱ目が行っちゃって、ちょっと高く積み上がりす  
 22 ぎて、離れているかなーとか思ったんだけどー、やっぱ振り向かせようとしても、赤ちゃ  
 23 んだから、やっぱ自分のこの目線で見えるところに行くのかなー、そっちへ。でも最初離  
 24 れて見てるときは、こっちのCの積んでる積木も見てましたよね。そっちに向かってど  
 25 っちかっていうと、歩き始め…、ハイハイし始めたけど、だから、こっち、Cは先に積み  
 26 あがっているってなっちゃって。こっちが動いているからそっちに行こうとしたら、こっ  
 27 ち見て、こっち見てみたいな感じで、ひっくり返ったように見える。  
 28 最初見たときはー、おにいちゃんたちに向かって、みんなが遊んでるから、その中に入  
 29 ってー、もちろんそれ、仲間になりたいもあるんだけどー、見てると、積木積んでる行為  
 30 に好奇心があるのかなと思った。

[クリップ1映像3回目を流す]

- 31 [Yは]まだ壊すだけで、積むことはできない。  
 32 多分前へ進んでるだけ。赤ちゃんはこういう感じで、中々振り向かないと思うんですよ  
 33 ね。赤ちゃんは前進しかない。子どもって前向きに生きてる。子どもって身体も嫌いだけ  
 34 ど、気持ち的にも振り返るのが嫌い。子どもって後ろにフィードバックする記憶ってない。  
 35 乳幼児もそう。子どもは、引っ張り戻されるのが嫌い。

[お茶を飲む(休憩)]

- 36 おじさん [Dの母の従兄] がなくなったときのことおぼえてるんだけど [Dは当時3歳]  
 37 それをまわりの人は絶対うそだ、おぼえているわけないと  
 38 いうんだよね。3歳にもなっているのに、大人は覚えているわけないと言ったもんね。  
 39 たぶん、お葬式のときのことだと思うけど、はっきりおぼえてるんだよね  
 40 見た記憶があるんだけど、みんな周りの人は絶対うそだ、おぼえているわけないという  
 41 : : : 3歳にもなっているのに : : :  
 42 おとなはおぼえているわけないといった

## インタビュー7 (トランスクリプトE)

対象者：20代未婚男性 (E)

日時：2004年10月30日

場所：著者宅

形式：〈1対1〉での質問回答形式だが、会話的な状態で行なった。

状況：事前にインタビューへの協力を依頼してあり、承諾を得ていた。遊びに来るついでに引き受けてくれたという状況であったので、比較的にリラックスしていたが、このような真面目な雰囲気では話すことはあまりなかった。いつも一緒に遊ぶときよりも緊張感があったかもしれない。20歳代後半、独身、乳児



Yやその他の映像登場者と面識はないが。男児Cとは親戚でたまに遊ぶことがある関係である。男3人兄弟（全員未婚者）の真中。

選択事由：Eをインタビュー対象者として選択したのは、乳児の映像（クリップ1）に無関係、すなわち非当事者であり、著者の前で比較的反ラックスしながらインタビューに答えてくれそうな人ということで選択した。EはDと違って、クリップ1の登場人物であるCと遊んだことがあり、映像に関しても、Dとは別の見方をしている可能性があり、関心をもって、対象者として選択した。

時間：約30分間

概要：クリップ1のなかの登場人物の@動きについて解釈を述べ、自分は赤ちゃんはよくわからないと語る。

トランスクリプト字数：2204字

トランスクリプトEの抜粋根拠：Eが、Yや男児Cや赤ちゃんについて語っている部分を抜粋した。

### トランスクリプト7（トランスクリプトEを含む）

[クリップ1映像1回目を流した]

1 この子は何歳ぐらいなの？

—1歳ちょうど、ちっちゃい子はね

2 （ふーん）

—赤ちゃんが何しているかってことと、C（子ども1）とかみ合っているかを見てほしいの。

[クリップ1映像2回目を流した]

—以上なんですけど：：なんとなくわかる？

6 あー：：

—何をしたかったのか、とか

8 何をしたかったんだろう：：赤ちゃんは：：いや、そんな難しく考えなくていいんだよ

—いい、いい、いい。

10 うん

—そのまま言ってくればいいの。何もわかんないのでもそれでもいいの

12 もうほんと、目の前にあるもので、遊ぼうとしてた、目の前にあるもの、ほんとに

13 近くにあるものに興味が移っていくように見えましたね。

—ああ、で

15 で：：

—うん

17 えーと、で：：、h h h何が起こったか：：あの、ほらこっち、とかほらあっちとか、えー：：

18 いってくれることで：：興味をこうキョロキョロむけてたけどー、やっぱ、[Cが]

19 初めて会った、って感じ：：初めてっていうか、いつも近くにいる人じゃないってような？

20 ことが、赤ちゃんの？表情とか、とかから、はーなんとなく、[読み]取れた感じしますね。

—そっか

22 でー、でもすごく興味は、赤ちゃんのほうがもってる感じ、でー：：あっちだよ、

23 こっちだよという：：そっちの方をキョロキョロ向いてたしー

—うん

25 なんていうのかなー：：

—あの、6歳の子はね、おねえちゃんなんだよ、赤ちゃんの：

27 うん、うん

—だから、きょうだいだからいつも一緒に：：

29 やっぱ、あのおねえちゃん、とはものすごく自然に、いた感じ、がしたね。

—ふーん、で：：じゃ、かみ合ってるっていうか、一応かみ合っているみたい？[Cとは：]

31 そうだね、でも、[Cとは]ほんとまだ：：で、こうお互い確認しながらってうか  
 32 えーと：：とくに、あれじゃないかな、赤ちゃんは：そうでもないのかもしないけども、  
 33 赤ちゃんは、大人でも何でも、えーと、ああ、あんまり見たことない：：人だなみたいな感じで、  
 34 でも遊んでくれるのかなってというような感じ、はとれた。

ーああ

36 で、逆に：：、Cちゃんの方が、あの、遊びたいんだけど、どんな感じで扱っていいのか  
 37 わかんないで、ほらちっちゃいし、おっかなびっくりみたいなの：：感じに見えましたね。

ーふーん、すごい。えーと、赤ちゃんについて、自分の見方ってうか、こんな感じってうか、ある？

40 赤ちゃん？あの映像以外で？

ーなんとなくわかるってことある？

42 うん、なんかやっぱ、表情とかで：[赤ちゃんは]なにで笑ってくれているのか、なにで楽しん

43 でくれているのか、なんかわかんなくって：で、やっぱ、喜ばしたいな、と思って遊ぶんだけど：：

44 突然泣いちゃったりして：：で、何が悪くて泣いちゃったのかとかが、わかんなくってー

ーうん

46 「慣れてないからっていうのもあるんでしょうけど。つついこう、僕もおっかなびっくりさわ  
 47 っちゃうんです。」

ーうん

49 たとえば、こう、抱きかかえたり：：：してみるのでも、どんぐらい力いれていいのかとかが、

50 わかんなくって。やっぱ、すごいみるい [方言＝「壊れやすいほど柔らかい」の意] じゃないですか。]

51 だからね、こわいんですよね

52 えー、ま、うっかり落としたら大変だ ふふ [笑い声] っていうことも思っちゃうしー

ーあんなちっちゃい子と遊ぶことはあまりないよね

54 ないですねー、だから：：えー知り合いの人が、こう抱いてても、僕なんか怖くて、こう抱か

55 してってとは言えないですよ。抱いてみたいなどは思うんですけど。で：だから、よちよちして

56 るのを、遊んだりするのは好きなんですけどーうーんと、抱いたりとか、コミュニケーションが

57 へたくそかな、どっちかっていうと。(だけど) いっしょに遊んだりするのは好きなんだよね (笑)

ーうん、よくね、子どもと遊んでくれる人だもんね。でも、あんまりちっちゃいとよくわかんないってうかのあ  
 るよね)。

62 もうちょっと大きい方が。

ーじゃあ、最後にもう1回ビデオ見てほしいんだけど：：(実は)積木の塔が2個あるんだけど、  
 赤ちゃんが、そのうちどちらかを倒したいというのがあるのかどうなのか、もし、気がつくことが  
 あったら、注意して見てくれる？

[クリップ1映像3回目を流した]

ーどうでしょう？

67 最初は単純にあの高い〔積木塔〕の：：行ったと思うね。そのあと、ちょっと待て、とかやっ

68 て、あれでもやっぱ、物よりこう人に行ってた (感じ)

ーあ

70 おねえちゃんがこう積んでたから

ーおねえちゃんめがけて来た？

72 おねえちゃんがやってるのを、ちょっかい出したかった、ふうに見えたね。最初は間違いなくあ

73 のでかいのに、行ったんだけど：：そのあとみんなが声かけて、こうキョロキョロして (そした

74 ら) おねえちゃんが遊んでいるように見えたのかな、そしたら、そっちにちょっかい出してる：

75 ちょっかい出したくなかったのかな。一緒に遊びたい：ってうか、で、で、で結果的に？あっち

76 向いてたから。目の前を (笑) ただ壊したって風に見えました (ね)

ーそっか、とくにどうしてもこっちというのがあるんじゃないかって、たまたま目の前にあったからってうか：：

79 そうそう、でね、とくにそのときに、おねえちゃんがこう積んでたから：：そっち行った  
—ふだん一緒に遊んでいるあねえちゃんがいるから？

81 うん、それかー、ただ、誰かがいるから、誰かがこうあそんでいるからっ（て）。一緒に、積木

82 っていうか、誰かと一緒に遊びたいっていうように思ったように、ぼくは見えましたね。